

ずいそう

## 心をこめて海とつき合う

渋谷 正信



私は、潜水をして水中で工事や調査を行う潜水士である。

24才の時に潜水士の資格を取り、以来国内・外の水中を潜り続けてきた。約40年間で潜水時間は、3万8千時間余りになる。

若い頃の潜水は「海洋開発」という名の下に、海の開拓魂にあふれ日本各地の港湾建設や海洋構造物の水中工事に携わってきた。効率良く水中作業をこなし、依頼主の要望に応えるべく海の中で構造物を造ってきた。

伊豆諸島の港湾建設の時は、海中の磯を水中発破で壊して定期船の着く岸壁を築いた。潜水技術や作業技術に工夫を重ね腕を磨いた。

腕のいいダイバー（潜水士）と言われることが私の生きがいであり、誇りであった。

昭和の時代が終わろうとする頃、私は環境問題について耳にするようになった。熱帯雨林の伐採は地球環境を悪化させる原因だと言う。山の木を建材として活用したり、人間の生活に利用したりすることは当然だと思っていたが、その木をむやみやたらと伐採すると、山が荒廃し、森林のCO<sub>2</sub>吸収が低下、地球の温暖化という問題をひきおこすと盛んに言われ始めた。さらには、土木工事などで山を削ったり、自然の海岸線に手をつけることも環境破壊になる。コンクリートで河川の堤防を構築する、海を埋め立てることも環境破壊になると言われた。

ある時、テレビの映像で、熱帯雨林の伐採を阻止しようとする人々と、開発者側が強引にチェーンソーで大木を切ろうとしているシーンを見た。その時、チェーンソーで大木を切っている開発者と、私のやってきた海の中で磯を破壊してきた行為が重なった。「彼と私は同じだ—」

ショックであった。今まで海を開発して、社会に役立つ潜水士になろうと技術を磨き、誇りを持ってやってきた。その仕事で、環境を破壊していることに繋がっていたのである。その時から、自分の仕事のあり方に迷いが出て、彷徨する日々が続いた。

そんな日々の中で、東京湾横断道路（現在の東京湾アクアライン）の建設工事が始まった。風の塔のある川崎人工島の建設時に、海中に潜った。その時、キラッと光る魚体があった。「クロダイの群れだ、魚がもう蝟集している」、海上に上がってから、再びクロダイの群れのことを思い出すと同時に、今まで見てきた海洋構

造物と水中生物のことが次から次へと浮かんできた。

海の中に構造物を造ると、場合によっては魚が集まるのかもしれない。自然環境には手をつけてしまうが、魚が住める環境になる可能性がある。そう気づいた時から、自分の仕事への迷いが消えた。以後、自分の手がける水中工事で水中環境を自主的に調べて記録を取った。

その一つの成果が、川崎人工島の建設に携わった時にまとめた「海洋構造物の魚礁化現象としての可能性」という報文とシンポジウム発表である。

私は現在、三つのプロジェクトを進めつつある。

一つ目は「海と調和したものづくり」。前述の港湾や海洋構造物を造る時は、人間の都合だけ考えて造るのではなく、海と調和したものづくりをしたい。そういう思いをプロジェクトにしたもの。

二つ目は「海の中の森づくり」だ。海の中の森＝海藻が豊かに生い茂る海が、今、日本の海から消失しつつある。海のゆりかごと言われ海中の生態系に極めて重要な海藻が、様々な要因で消失している。この磯焼けは、沿岸漁業にも地球環境にも、大きな打撃を与えている。そうした海を元気に再生したいという思いをこめてプロジェクトにしたもの。

三つ目は「海と調和する人づくり」。海中という自然環境に直接手を加える潜水士が、海と調和する心構えを持って作業をすること、それからレジャーダイビングをする人々にも海と深いつながり＝一体感を持ってダイビングを楽しむ、このようなプログラムでセミナーを行うものである。

この三つのプロジェクトの根底に流れているのは、「心をこめて海とつき合う」という思いである。心をこめて海とつき合うというのは、海にありがとうという感謝の思いを持って海に潜らせてもらうこと。簡単そうだが、海に従事している人や海で遊ぶ人に、心から海にありがとうと思って、海と付き合っている人は少ないと思う。ほとんどが自分の仕事や興味だけを考え、過ごしてしまう。少なくとも以前の私はそうであった。

海にありがとうと言える時は、心に余裕がある。この心に余裕を持つことが、良質の仕事や生き方を生むのではないか。心をこめると何がどうなるか、自分自身で確かめる、そういう心の技術の発達で、海や自然、そして人々と居心地の良い環境を創って行くように思う。